

小学校に在籍する特別な教育的ニーズのある子どもの 情報の共有に関する実践的研究

今藤 紀恵

I 問題

特別な教育的ニーズのある子どもは、特別支援学級、通級指導教室、通常学級に在籍している。

今年度から、特別支援教育に完全移行し、障害のある児童、教育的ニーズのある児童に応じるためには、個別の指導計画作成が必要である。しかし、個別の指導計画作成状況は、特別支援学級、通級指導教室においてもすべての子どもに作成していることはなく、通常学級においては、約半数近くが作成予定すらない状況にある。

小学校に在籍する特別な教育的ニーズのある子どもに対応するためには、個別の指導計画作成を目指して、学級担任、通級指導教室担任、特別支援学級担任、特別支援教育コーディネーター等、保護者との間で児童に関する情報を共有することが重要である。通級による指導の手引(文部科学省、2007)には、通級指導担当教員と通常の学級の担任とが綿密に連携しながら、校内及び校外の関係者の間で児童生徒の様子や変容の情報を共有しておくことが重要と明記され、情報を共有するためには、児童生徒に関わるそれぞれの担当教員同士が児童の様子や変化について定期的に情報交換を行うなどして連携に努め、指導の充実を図ることが重要といえと記されている。保護者との連携については、文部科学省発行の「LD」児等の理解と指導(文部省、1997)によると、学校と家庭の双方で、同じようなつまづきや困難が現れることもあるので、双方の連絡を密にして情報交換を行い、適切に対応することが大切である。こうした情報交換により、問題解決の糸口を見つけられることができるようになるものであると明記されている。

以上のことから、児童の実態に関する情報の共有を行うための方法を検討する必要がある。安藤

(2001)は、個別の指導計画作成を行う上で、実態把握を行うためには、まず児童生徒に関わる「情報の収集」が不可欠であるとしている。

II 目的

本研究では、小学校に在籍する特別な教育的ニーズのある子どもの指導における学級担任や保護者、特別支援教育担当者との情報の共有の方法について検討する。

III 方法

1 研究者の位置づけ

情報収集・提供及び、指導計画の作成、支援・指導の実行者。

2 対象

J 教育大学特別支援教育実践研究センターにおいて、構音指導、教科の補充指導を行う児童2名、その保護者並びに児童の学級担任2名。

1)A 児の実態

知的障害、構音障害があり、コミュニケーションにも課題が見受けられる小学校3年生の女児。特別支援学級在籍。

2)B 児の実態

構音障害及びコミュニケーション、教科学習に課題が見受けられる小学校2年生の男児。通常学級在籍。言語通級指導教室に他校通級している。

3 情報収集及び情報交換の方法

1)研究の参加者

対象児A児及びB児その保護者並びに学級担任。

2)情報収集及び情報交換の方法

(1)付箋紙を利用した情報収集

付箋紙(75mm×25mm)に児童の様子で心にとまることについて、客観的事実を主述関係が明確な文章で、カードを初めて読んだ人が児童の行動を鮮明に思い浮かべることが出来るように書いてもらうよう依頼した。また、付箋紙には1つの内容を書

くこと、記述の量として1枚の付箋紙に3行程度と設定した。

(2) 学級担任及び保護者への付箋紙や連絡帳を利用した情報収集及びインタビューによる情報収集

①A児について

担任、保護者と研究者が連絡帳での情報交換を実施。両者に日々の児童の様子について、付箋紙に記述していただき、その付箋紙を連絡帳に貼っていただいた。

②B児について

研究者が学校に出向き、学級担任からB児の様子について、聞き取りによる情報の収集を行った。保護者からは日々の児童の様子について、付箋紙に記述していただいた。

3) 個別の指導計画作成方法

安藤(2001)の作成手続きを参考に行った。

- (1) 情報の収束
- (2) 実態把握図作成
- (3) 個別の指導計画作成
- (4) 指導プログラムの作成・提示
- (5) 指導プログラムの実施と修正

指導期間中も付箋紙や聞き取りによる情報の収集及び情報交換を実施した。

- (6) 事後アンケート及び聞き取りによる評価

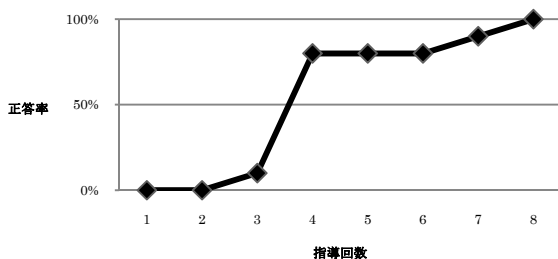


図1 A児の聴覚的弁別課題の正答率

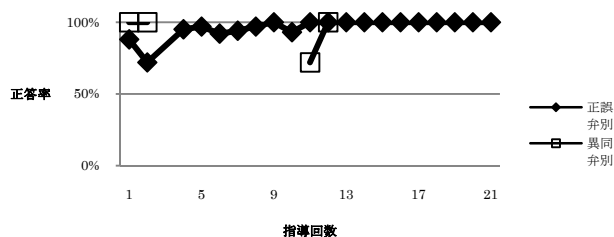


図2 B児の「ス」の音の聴覚的弁別課題の正答率

IV 結果と考察

1 A児及びB児の変容

収集された情報や諸検査等から個別の指導計画を作成し、それに基づく指導を実施した。その結果、A児及びB児ともに、構音指導における聴覚的弁別の課題での正答率が上昇した(図1から図3)。

2 保護者及び学級担任の情報の内容

保護者及び学級担任に児童の様子について付箋紙への記述や聞き取りを行った結果、保護者及び学級担任からの情報の内容は、主に児童の様子について記述されており、主訴である構音障害の記述が少なかった。また、記述する回数を重ねることにより、児童の「昨年までの様子」と現在の様子と比較し、「児童の成長」を感じている記述内容が見られたり、学級担任については学級全体を見ることができるようになった等の記述内容の変化がみられた。そのため、児童の様子について記述することや指導者に語ることは、児童の成長やニーズを具体的に捉えることを促すとともに、児童についての理解を深めることにつながるのではないかと考えられた。そして、保護者や担任は、記述を重ねることにより具体性をもった情報を記述することができ、提供することができるようになったことから、安藤(2001)の情報収集の方法は、保護者や担任からの情報収集を行う方法として妥当な方法であったことが考えられた(図4から図7)。

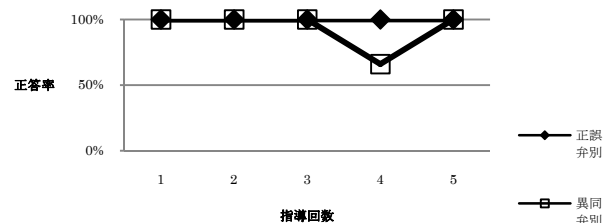


図3 B児の「シ」の音の聴覚的弁別課題の正答率

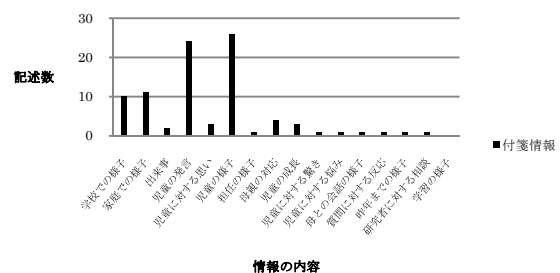


図4 A児の保護者の付箋情報

